

本校生徒が地域のみならずからこういった評価をいただいているのか、とても気になります。時折連絡が入るのが、自転車の運転マナーの悪さです。2列走行の注意もあれば、2人乗りの指摘もあったりします。しかし、「挨拶がいいですね」とお褒めの言葉をいただくことも少なくありません。

本校には、挨拶同様、気遣いに優れた生徒がたくさんいることを紹介します。先日の放課後、教員駐車場付近でたくさんの荷物を抱えて車に向かっていくと、通りかかった野球部の男子生徒が「お持ちしましょうか？」と声を掛けてくれました。また、登校時、校門前の道路横断の際、一時停車していただいた車に向かって深いお辞儀をした女子生徒がいました。いずれも胸が熱くなった瞬間です。協創生、嬉し、逞し、誇れしですね。（右は、中学3年生の家庭科で、「読み聞かせ」をした様子）



読書が人生をつくる

5月12日（月）の全校朝礼で、読書の大切さとその効果について話しました。

なぜ「読書」について触れたのかというと、連日の如く新聞やテレビ、ネットニュースなどを通じて、若者の読書離れを嘆く報道や報告がなされているのが一つのきっかけです。また、「町に本屋さんがなくなった」という報道を聞くにつけ、若者だけではなく大人までもが読書離れ、本離れであるという実態が加速していることに危惧しているからです。さらには、現代社会がアナログからデジタルへの移行ということもあり、本などの紙媒体が遠ざかり、スマホで読書ということの影響もあるのですが、SNSによる情報発信や共有が今日欠かせないコミュニケーションツールになっていることも読書離れに拍車をかけているのかもしれない。

いずれにしても一億総読書離れは深刻な問題のように思えて仕方がないのです。

講話の内容は、私が定期購読している雑誌『致知』の一部の紹介を軸にしました。「読書は国の未来を開く」というテーマで、建築家の安藤忠雄氏と京都大学 iPS 細胞研究所名誉所長・教授の山中伸弥氏が対談しているものですが、その中から引用し、次ように生徒に話しました。

『致知』という雑誌で、建築家の安藤忠雄さんと世界で初めて iPS 細胞の作製に成功し、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さんが「読書の大切さ」について対談していました。お2人は有名な方ですから説明するまでもなく、知っておかなくてはいけないお2人ですね。その山中さんが安藤さんに次のように語りかけています。

「読書は2つの意味で非常に大切だと考えています。（中略）特に大作を読むことは著者との格闘ですし、時間もエネルギーもかかります。でもその分だけ集中力、忍耐力、持続力、探究心といっ

た長い人生を生き抜くための基礎体力が身につく。もう一つは、自分だけでは経験できない他の人や過去の人の生き方や価値観を学ぶことができる。自分もかくありたいという目標を与えてくれる。それが向学心や向上心に繋がっていくんです。それに対して安藤さんは、「人間、憧れを持たなければいけませんよ」と答えているのです。

読書がいかに大切かというお2人の見解でしたが、イメージが沸く人はたくさんいることでしょう。私も経験的に思っていることがあります。中学・高校と多感な時期に、まずやっておくべきこと、優先順位は「読書」だということです。この時期に読書という行為を通じて、心を耕し、鍛えた人とそうでない人の差は、年齢が行くほど開いていくように感じています。中高時代はスポンジが水を吸うが如く多くのことを吸収できる時です。心が育まれると挑戦心が生まれ、有益な経験を積むことに向かうのです。そうした連鎖が人生を豊かにし、幸福に繋がっていくのだという実感の日々悟っています。

最後に、1週間に4日～5日、10分間の「朝読書」、侮るなかれ。年間を通じたらどのくらいの読書時間になるのか、計算してみてください。そして、みなさんがスマホに費やす時間を少しでも読書に回せたら、ということなのです。平気で何時間も費やしている人、そろそろ真面目に考えてみたらどうでしょうか。今日は、読書の大切さについて話しました。終わります。

上の写真は、『とべ、ちいさいプロペラキ』の読み聞かせをした様子です。見事に聞き入っていました。中学3年生の家庭科で保育体験（実習）があるというので、事前学習の一環で行いました。学童期までの読書（読み聞かせ）が大切なんだよって話したら、生徒は大きく頷いていました。10年前？ のことを思い出したのかな。